

世界氣象觀測報告書

氣象觀測協會
W R A

戦 略 ス ロ ー ガ ン

- 万国の労働者被抑圧人民は団結し 世界革命戦争―世界プロ独―社会主義―共産主義建設の共産主義革命に勝利せよ！
- 世界同時革命勝利
- 国際帝国主義を反帝プロレタリア革命戦争―世界革命戦争で打倒し
- 世界プロレタリア独裁を樹立せよ！
- 現代日和見主義―現代修正主義を粉碎し 世界党―世界赤軍―世界革命戦線を建設せよ！
- 日本プロレタリアート人民は 反帝植民地革命戦争を世界革命戦争に勝算し 国際帝国主義の侵略反革命戦争を粉碎せよ！
- 侵略・抑圧・反革命―差別分断支配攻撃粉碎！
- 安保―M A T R O ― A S I A M ― 国際反革命同盟粉碎！
- 米帝国主義の対日反革命粉碎！
- 日本帝国主義打倒！
- 社会民主主義―社会ファシズム勢力の反革命策動を粉碎し プロレタリア独裁の権力機関―世界革命戦争の闘争機関―臨時革命政府（革命戦線政府）を樹立せよ！
- 非合法中央黨権―職業革命家の党軍事組織―労働者地下細胞の党を全戦線に配慮せよ！

○ 党の軍隊を中軸とする革命武装勢力建設！
○ 労働者を基礎とする被抑圧人民の統一戦線建設！
○ 反帝プロレタリア革命戦争を闘い取る正規の攻囲建設！

第二回中央委員会告示

中央委員会

一 七六年×日×日より×月×日までの×日間をわたり、国内の××に於て、中央委員、同候補の全員の参加のもとで、党第二回中央委員会が、非公然の完全なる防衛体制の中で圧倒的に開催された。

二 最初、参加者の資格の審査が、統制局責任者によって、敢密に行なわれ、全員に第二回中央委員会への参加の資格がある事が、認められた。

三 次に、第二回中央委員会の議長が、第一回中央委員会選任の中央委員から選任された。

四 次に、議長より、本委員会の現下の階級情勢、なかんずく日本革命戦争の中で占める我が党の革命的意義が明らかにされた。

五 次に、中央委員××より、本委員会の「政治報告」がなされた。

六 次に、報告された「政治報告」、特別報告」に対する全員の徹底した討論、質疑が長時間にわたってなされ、最後に、同報告は満場一致で採択された。

七 次に、中央委員××より、階級情勢総体にわたる現状報告がなされ、全員の徹底した討論、質疑の結果、最後に同報告は満場一致で採択された。

八 次に、中央統制局責任者××より、「脱盟決定決議」、同「声明」の採択決議がなされ、徹底した討論、質疑のもとに、特別に中央統制局からの事情聴取がなされたうえで、最後に同決議は、満場一致で採択された。

九 次に、中央防衛局責任者××より、「七四年十二月二日弾圧」と、「同志高田全国指明手配」に対する中央委員会による

「糾弾声明」の原案が提出され、満場一致でこれを採択し、あわせて全党の更なる赤色報復絶滅戦への前進が決議された。

十 次に、中央委員××より、第一回中央委員会で採択されたスローガンに関する若干の変更の動議がなされ、「スローガン問題について」の中央委員会声明の原案が提出され、全員の徹底した討論、質疑の決果、最後に同原案は、満場一致で採択された。

十一 次に、中央委員××より党の組織的現状、問題及びそれに関連する方針の「組織報告」がなされ、満場一致でこれを採択した。

十二 次に、中央人民組織部責任者より、党の指導する、もしくは党組織の配置された各戦線の現状、問題及びそれに関する方針の「戦線報告」がなされた。

十三 次に、中央軍事組織部責任者より、党の中央軍及び党の武装あるいは全般的軍事情勢の現状、問題及びそれに関する方針の「軍事報告」がなされた。

十四 次に、中央宣伝局責任者より、党の機関紙及び全国政治新聞に関する現状、問題及びそれに関する方針の「宣伝報告」がなされた。

十五 次に、中央防衛局責任者より、党への弾圧情況及び破壊活動の現 問題及びそれに対する対処の方針の「防衛報告」がなされた。

十六 次に、議長より、本委員会に於ける中央委員×名、同候補×名の選任が確認された事の報告があり、全員の拍手のうちに承認された。

十七 次に、議長より、各部署の責任者の選任が確認された事の報告があり、満場一致で承認された。

十八 最後に、議長より、本第二回中央委員会が全員の圧倒的団結のうちに勝ちとれた旨の報告があり、行動スローガンを満場一致で採択し、第二回中央委員会は終了した。

前進の大会 第三回中央委員会の圧倒的勝利高才！

中央委員会

全党の同志諸君！闘う戦友達！階級的兄弟友人諸君！党中央はここに党第二回中央委員会が、全ゆる苦難を乗り越え圧倒的な団結を勝ちとり、更に党の組織的・政治的・軍事的な前進を勝ちとった事を宣言する。

更に世界的な階級激突と世界革命戦争の時代の中で、七十年代中期から後期にいたる世界共産主義革命としてのプロレタリア社会主義革命を、革命党共産主義党の世界的発展拡大としてその任務を闘い続ける我が党にとって、この第二回中央委員会の開催と、その勝ちとれた団結と、そして我が党の階級方針のそれぞれ有する階級闘争上に占める意義はまったく大きなものであり、単に政治警察との機嫌地下攻防の中で、党の非公然下に於ける中央の集結、中央委員会が開催、そして全党の計画的配置・戦術が秘密裏のうちに、勝ちとられたという意義だけにとまらぬものである。

第一に、七四年一中委以降の血で血を洗う、苦節の党建設・階級指導・革命戦争の地下闘争は、他の諸諸の諸派の混乱・分岐・停滞あるいは、日和見主義上の一致に於ける野合・合併という解党主義の敗北状況の中で、日本に於ける唯一の地下革命党として、政治警察からの二重、三重にわたる攻撃を突破し、その革命的雄姿を今日の全国的組織体制の確立の中で、党的前進の中で勝ちとったのである。党に加盟しているだけで、逮捕の状況になり、全国政治諸報の発行に関わったという事で党員から党支持者印刷所から販売書店まで、その全てが捜査・ガサ・押収そして逮捕・指名手配されるといって我が党が、しかし、この一年有余の闘いの中で、当初はたとへ敵によって非法に追いこまれたものであったとしても、この非法

法に於ける党の確立を、逆に、プロレタリア権力と共産主義の現実的な独自の地下（非合法）権力へと、政治的階級的に高めるとい

う共産主義運動の立場として逆規定し、唯一我が党のみが可能であったこのプロレタリア権力・プロレタリア共産主義という位置からの非合法の中央集権主義の問題を解決した。今日まで、レーニンを語りながらレーニン主義としての非合法法、中央集権主義、職掌の党的階級的立場を埋解する事ができず、それを単なる組織に於ける機能、政治警察との関係からのみそれを規定する、それらの技術問題での見地からする「非公然」の問題の把あくという権力問題・共産主義に於ける民主主義・日和見主義の立場に対して、我が党は、我が党が初めて革命派として非合法へと突入する事でもって、真実、「非合法」の問題を現実の階級上の戦術・組織の問題から路線の問題へと吸引させ、組織の機能や技術の問題から解きはなし、階級路線と政治権力の問題として、すなわち、プロレタリア権力の問題として、それらブルジョア独裁権力に対する我が党の「権力の問題」として、それらブルジョア独裁権力の今日からの権力遂行の問題として、我が党の「非合法」とは、敵に対する組織の機能の問題ではなく、未来から規定された今日に於ける党の権力実体の存在形態と運動の問題であり、現在の権力の存在を期定する、特に、「二重権力」の存在の問題であるという事なのである。ブルジョア独裁権力の存在としての「合法」に対する、共産主義・プロレタリア独裁権力の現実的存在としての「非合法」なのである。この立場を、非合法活動から出発せねばならなかった我が党のみが証明しつくせたのである。

第二に、この立場から、我が党は、一中委以降発生した「左」・「右」の日和見主義としての、軍事戦後主義・職関閉主義と職線細胞主義・大衆運動主義の二種の経済主義の見地を、党の革命戦争下に於ける非合法法、中央集権主義、職業革命家の党、という共産主義党の立場でもって党的に止揚し、それらに内在する民主主義派としての本質

第二回中央委員会 政治報告

第一章 当面する我々の任務と革命路線

第一節 七五年期の苦闘の地下組織・労働者秘密細胞建設の成果を審みしめ、地下革命党・革命軍（赤軍）建設の大道を標進しよう！

を粉碎し、今日に於る諸党派のブルジョアイデオロギ、自然発生性の組織的表現、戦術上に於るその立場を解体するための党派闘争と一個二重の党内闘争として、すなわち、プロレタリア共産主義を巡る権力闘争の問題として闘いぬき、その勝利として、第二回中央委員会を開催し、それに勝利し得たのである。

この党の組織的勝利の高地の上で、党中央は、七六年期に於る党工作の三大指標として、1.党細胞の全線配置と拡大、2.党の全般にわたる政治宣伝の強化、3.党中央軍を中心とする全線線軍活動の拡大の三点を決定し、1.地下体制、2.全国政治新聞、3.軍事攻勢の三点の問題として現実化する闘争へと突入したのである。

全党の同志諸君！闘う戦友達！階級的兄弟友人諸君！党中央の指示するこの三大指標を、あらゆる戦線・機関の中で、具体的な様様な戦術として現実化、実践化の闘いを更に押し進めよう。共産主義は勝利する！第二回中央委員会の勝利万才！

一九七五年は、我我にあって苦闘苦闘の中ではあったが、しかし実に実り多い年でもあった。七四年十二月二日の我が党への爆取四

条の「改組・煽動」罪適用での全国一斉捜査とそれ以降の連結した機関紙押収再禁止、そして同志高田の全国指名手配は、我が党の機関紙の内容そのものにブルジョア刑法を罪状として適用するという事で「革命の宣伝・煽動」が、すなわち刑罰の対象として、規定される事に於て、朝野戦争時に於ける日共非合法化の弾圧に続く革命思想そのものへの大弾圧であり、そして機関紙発行禁止・執筆者逮捕・手配という形に於いて、実質的な組織破壊防法の適用でもあった。かつて七十年ハイジャック時での、戦後初の「政治集会禁止」が、後の中核派等へと適用されていったように、この「機関紙を発行する」事自体が、すなわち「革命の喧嘩」に「機関紙を弾圧する」事自体が弾圧されるという今日の事態は、少なからず敵の弾圧攻勢として、今後更に拡大して展開されていくであろう。我々はこれを視すえて、我々の陣型・組織を造らねばならず、党の直接的反撃とあわせて、この弾圧・ファシズム攻撃への大衆的反プロファシズム抵抗闘争を大胆に組織し闘い続けねばならないし、そして我々の七五年一年間の闘いは、まさにその闘いの第一歩であったのである。

もとより、この帝國主義治安攻撃、政治警察との闘いは、反帝

民主主義勢力としての闘いを続けるプロレタリアート、被抑圧人民の総力を、かつその闘争の中で大衆自らが創出し闘いの基盤となる革命武装勢力としての革命軍（赤軍）を、そしてその一切の階級的闘いの主導部としてのプロレタリア革命党の、それら大衆一軍一党の総力を日々拡大するフアシズム攻撃、浸略抑圧反革命一差別分断支配攻撃から確実に防衛するということ、今日の帝國主義國內に於ける全階級的な課題として存在している。そして我党（軍）はこの三戦線での防衛に、反帝闘争としての大衆を大衆運動の反撃闘争として守り、ようやくその芽を端初期から幼年期へと成長させた革命武装勢力（地下ゲリラ軍）の全部を、共同軍事行動、武装統一戦線、革命戦線を結実発展させ人民武装の強化という一点で防衛し抜き、そしてなりよりも、全組織の軍事組織体制と、労働者秘密細胞体制としての党（軍）の組織的防衛と地下体制としての強化発展という党自身を守る闘いとして、我々はこの一年有余の全勢力を注ぎこんだのである。

我々は、先の七四年十二月二日の組織撤防法（爆収）攻撃に際して次の痛苦の総括を確認した。

一 党建設以降わずか四月の未だヨチヨチ歩きのみ、確かに社会主義への理想と、階級闘争への献身性と、そして帝國主義反動へのへたざる戦闘性は持ちつつも、階級闘争を共産主義運動として打ち破る準備イデオロギーの立場と、人民を勇気づけ確実に敵を弱体化させる現実的闘い方と、そしてその闘いを個人としてではなく、階級の一部、共産主義政党の一員として、組織的運動として展開するということ、それらの事にはなはだ、多くの限界性を有していた（それは決して弱さとしては、非難されるべきものではないのだが）、その我々の幼ない努力のその時こそが、我々にとつてこの数年間の政治警察との攻防の中で得た全ての教訓を駆使しての最大限の組織防衛の闘いが要求されてきたという事である。

二 政治警察の攻撃が、ただ単に闘争の直接的弾圧という事ではなく、また一定組織、一定個人にむけられているというものでなく、せねばならなかった（のであり）接触一闘争というミエミエの体制の中で、他方で組織的体制とその整備と、長期路線としての革命戦争陣型の構築、非公然組織の活動に於ける思想性、組織性、そして計画された戦闘という基本命題をぬきにして、決意と、局面打開への情熱と、自然発生的な戦闘志向としての「革命的敗北主義、玉碎主義」をその組織の内部に不漸に流入させており、その意味で特に他の諸君からある面での正しい批判としての「党建設と一体となった組織的闘争」という目的意識性の欠落が、たとへばいかなる不備な組織的情勢であつたとしてもいささか暖昧すぎた事。

五、そして我々は我が組織の性格を、軍事行動一ゲリラ戦を展開しつつ、地下体制一労働者秘密細胞軍事組織の党を建設する事の目的意識性を、党一全細胞が他方で公然と一切の大衆闘争をその先頭で闘いそれを政治闘争として指導し、全人民の中に各種の統一戦線を建設していくという、重層的同時一体的な我々に課せられた任務を、時としてまったく一面化させ、「何から始めるべきか」という事に於いて、その組織一ゲリラ闘争を第一とした戦闘蓄積とその影響性から党一細胞建設を規定するという、我々の無しき軍事自然発生性を再現し、その事で党的路線一綱領的立場の全組織への普遍化と均一な共産主義的結合として勝ちとる事を暖昧にして、組織活動でのまったくの危険さわまりない不備な体制に目をつぶり、ただかつての大衆武装一ゲバルト政治の如くの「決意」のみによつて、この組織の性格を色濃く表現したのであり、この將に党としての分散性、手工業性、そして自然発生性のその限界に、政治警察は集中的攻撃を加へた事。

我々はこの痛苦の自己切開を、党再建一中委以降の最大の危機として扱え、かつ我々の総路線が再度、我々のその路線への組織的実践の不充分性としての表現という反面教師である事を確認し、路線の更なる徹底した密な蓄積した、そして大胆なる組織闘争を確認し十二・二弾圧以降の困難な七五年期組織戦へと突入したのである。

およそ反動化と闘い、人民総体の利益を守り、そして社会主義への闘いを名実ともに正面から闘おうとするそのイデオロギー、運動、諸個人全てを抹殺すべく、特定の法的弾圧というのではなく（刑法改「悪」等）、日常不断の攻勢弾圧として、特にある意味で、その様な革命的思想実体が「シヤパー市民社会存在を」しているという事自体が、つまりは敵に対して「遊がされていく」という形として存在しているという事に対して、他のおしなべての「革命左翼」と同我々が、かつての我が旧同盟も含めて、未だ合法公然左翼サークルの残存を内的に有していたという一たえば、その指導者メンバーも言え相当多数が大衆には知られていなくとも敵には知られ、かつ他の同種組織に、一部活動家ルートを通じて全様が、ほ知られており、それがまた敵に「他党派状況」として、通報されており、機関紙発刊も印刷所から印刷人、そして執筆者の特長まで解読、判明させられており、なによりも非合法メンバーがある事か自己の所属組織を明らかにする形で公然と出資したり、またヘルムントなものを堂々とかぶるといふ、気持だけの非合法「思想」ゴッコ一組織に於ける自然発生性と手工業性、そして分散性をもとの見事に敵によって爆ろされ、ほぼ今日までの全ての革命左翼と同じく全容を察知されていたという、革命組織としての革命性の失格を明らかにされた事。

四、そして特殊には、我々自身の出発が、当時の赤軍派内党内状況に規定されて、党内一分派闘争の直接的闘争、他党派との、直視的な論争戦と、他方未だ自然発生的ないわゆる戦闘主義的ないわゆる「闘争」主義とも言える戦闘の具体的展開の総力突入という、いわば一方で他組織部との「公然」とした（それが主観的ではない）非公然であるという自らが思つても、「公然、赤軍派としての他党派との論争一党内分派闘争」を闘う限りに於いて、それは常に「公然」となる政治警察はその「論争」にこそ一切の注視を集中するのであり、そしてまたそこからの情報集取が最も量的にも質的にも多いのである。「左翼活動家」をこそ、その口の軽さ等に於いて最もとも警戒

組織内部にそれでも発生する二種の日和見主義を第一戦線に於ける玉碎戦闘主義、一発ゲリラ主義を批判しぬき、第二戦線長期大衆抵抗路線としての単純大衆運動主義を放棄しつつ、我々の、「プロレタリアート」に依拠する革命軍一革命見建設の地下細胞の建設とそれを迎えた非公然からなる大衆運動の独自の闘争一指導、そして「味方保存、敵消滅」の確実勝利戦としてある軍事行動一組織撤滅への組織的闘争この三重の闘争を全ゆる戦闘で全党をあげて闘いぬいできたのである。

この際が、もとより政治警察との死力をつくした攻防であつた事は言を持たない。単なる宣伝戦としてのゲリラから、真の人民を勇気づけ、敵をマヒさせ、そして組織を防衛拡大する、本当のプロレタリア革命戦争は、特に敵に対する「道理」ある攻撃、現在に於いては「やられたらやりかえす」という「赤色報復戦」の完全なる勝利戦であり、それは敵の攻撃の先兵としての政治警察軍への「激戦」確実に敵中核と敵前線部隊を激滅する闘いである事、この事を確認する我々は一切の組織的闘争一組織撤滅の主力をここにこそ於いたのである。時としての宣伝武装闘争一サボ、破壊もこれへの準備としての意味しか持たない。このかつて連合赤軍が遭つた、それへの解決を巡り「死にもくろむ」の闘争の過程で、その党的敗北と軍事的到達の表現の一発主義として、敗北したこの課題に、我々は党的路線的組織的強化と、人民が依拠する実践的組織的闘争一思想、そして計画された目的意識性に貫かれた戦闘一組織の達成という、総じての党一党員の路線一組織の一性としてそれへの解決の困難な闘いへの挑戦とその戦取を闘い取らんとしたのである。

この七五年期の闘争は、激進な党一建設と統一戦線工作の闘い、力ナメとしての、計画された組織的強化の闘いであつたのであり、党活動の面に於ける党内闘争と党派闘争を通じた綱領路線闘争、地下組織建設闘争、そして軍事体制確立一軍事活動と、党の「見えな形」での公然たる大衆活動の面での、反帝大衆闘争、地域一居住

に於ける、苦闘と教訓と、そして大勝利の「革命の高地」を断固防衛、発展させ、我々の次の更に輝き目標に向って我々は階級的先陣を切り抜かねばならない。そしてそれは唯一我々によってのみ、我が党によってのみ、我が戦争によってのみ可能なのである。我々がこの任務をいささかたりとも曖昧にしたり、それにちゅうちょしたりする事は、革命と、階級と、そして共産主義を裏切る事となるのである。

一歩一歩を確実に前進する我々の革命戦争の大道を更に進ませよ

第二節

プロ独を目指す 党建設と統一戦線工作を強化し、革命戦争の中でプロレタリア人民を獲得し、打ち鍛え、全戦線を政治闘争として武装させ、日本に於ける当面の目標として臨時革命政府樹立を闘い抜け！

革命の根本問題は権力問題である。それはブルジョア革命であろうとプロレタリア革命であろうと同様である。歴史は常にその事を明白にしているし、現実も又、帝国主義本面もしかり、世界的にも様々な形を取ってはいても、やはりブルジョアがブルジョア独裁として権力を持ち、世界を支配している事に於いて明白である。共産主義を目指す我々は、それ故、プロレタリア独裁を通じて社会主義の建設を階級闘争として追求する。そのプロレタリア独裁を樹立する為に、今日の全ゆる階級闘争の表われ、つまり自然発生的なとする政治闘争へと打ち鍛え、この闘いは、目的意識的な階級性をプロレタリアートの中に持ちこみ、そのプロレタリアートの本質的な階級性を引き出してこそ唯一可能となる。それは幾百もの嶺嶺や、おしやべりでは造り出す事はできないし、労働運動、労働組合の闘争一般の闘いの積み重ねでも勝ち取る事はできない。自然発生的

階級闘争の闘う陣型は、労働運動を闘う陣型の労働組合でもなく、大衆的要求を闘う大衆戦線でもなく、階級闘争を闘う政治闘争の組織としての、共産主義政党 革命党であり、この革命党の建設なくしては一切の階級闘争が、眞の階級闘争として存在しない事、同目的、目的意識的な階級性を、唯一実体的に表現するものとして、プロレタリアートが、他の階級に対して独自の階級的政党へと自己を階級的に止揚してこそ、プロレタリアートとしての階級の立場を打ちこわし、階級的に解放される事ができるのだという事、プロレタリア社会主義、そして階級のない社会としての共産主義の実現へ向けて階級闘争を闘い続ける為の唯一の武器としての共産主義政党 プロレタリア革命党の建設と存在が不可避であり、その建設・強化の闘いを、党そのものが自己拡大として、プロレタリアートを階級的に止揚させたものとしての共産主義者の組織・実体・権力として確立化する事、その為の全ゆる形での闘いを実践する事、この闘いを政治闘争・権力闘争の根幹として、即自的なプロレタリアート人民の闘いと相対的独自に、しかし不可分に結びついた闘争として実践しなければならぬ。もとよりこの闘いが、ブルジョア側の「与えてくれる自由」を超える「自由」を追求する「自由」を持つ事に於いて、ブルジョア独裁権力とは当初より対決する、自己の権力闘争として、すなわち権力を巡る闘い、戦争、特にプロレタリアートの側からする革命戦争として闘われる。この党の目的意識的戦争が存在してこそ、政治闘争への爆露、宣伝、煽動も物質力を持ち、この根拠地を持つ事によって、即自的なプロレタリアート人民の闘争を、それ自身がいかに止揚し、いかに闘かわなければならぬのかを、プロレタリアート人民が確認する事ができるのである。我々の根拠地がプロレタリアートの中にあるのではなく、プロレタリアートの根拠地が党なのである。階級闘争の一切はここから出発する。この両者が、その当初に於いて、それがいまだ互いに目に見えない糸で結びあわされている時、その闘いの実践が、敵の制圧力に比して、未だ小さなものである時、ともすれば全然異なる方向での闘

的な階級闘争の表われを、目的意識的な政治闘争・権力闘争へと導く実践、すなわち大衆闘争そのものの政治闘争への領導と、最初からの一貫した政治闘争・権力闘争を階級闘争・革命戦争へと闘い続ける事でのそれへの吸引である。権力闘争が、ブルジョア独裁権力を打ち倒すプロレタリア権力の問題である事を知っている者であるならば、誰しもその権力闘争が、プロレタリアートの側からすれば、革命戦争・階級闘争である事を確認する。しかし問題は今日その革命戦争を認めるか否かではなく、実践するた否かであり、そしてまた、いかなる方法で、いかなる陣型で実践するかである。現在の共産主義者の根本問題はここにある。そうであるが故に、共産主義者政党・革命党の建設が全ての課題となる。党の建設が一切の問題の解決のカギとなる。

一見すれば二重に見える構造で政治闘争の問題は闘われる。ひとつは、自然発生的な即時的要求、抵抗、噴激のプロレタリアート人民の闘い、すなわち大衆闘争を、それ自身の闘いの中で、プロレタリアート人民と共に闘い、かつ指導し、その最先頭で、全ゆるブルジョア独裁、ブルジョア側の階級支配の表われに対してひとつひとつ抵抗の闘争を組織しつつ、その闘いの内部に、眞の階級的解放の唯一の道たる、共産主義・社会主義への道たるプロレタリア独裁へ向けた政治闘争への方向と目標を注ぎこみ、階級の本質を、ブルジョア独裁を、ブルジョア社会を、そして国家権力の実体を、あるいは他方、プロレタリアートの階級的根元を、勝利する階級的立場を、生産関係の中での勝利の根元を、して社会主義・共産主義への科学的根拠を、明々白々のものとする為の爆露と宣伝、煽動を、執ように、そして力強く指し示す事を、生きた階級闘争の実践の中で、単なるピラ、パンフや、あるいは難解な「綱領」と称するおしやべりだけでなく（もとよりその場合は眞の「綱領」とは言えない）闘いの実践、その英雄性献身性、そして指導の正しさを、目標の明確さで指し示し、それ等の陣型・隊列へと、すなわち目的意識的階級軍隊として隊伍を整え、前進し、ブルジョア側・帝国主義への攻撃をより大胆に押し進める。そしてひとつは、そのプロレタリア社会主義へ向けた闘争

いとしてしか、即自的な自然発生的な大衆にはうつらない。しかしこの自然発生的性を、党が、党としての闘いと、党の為の闘いとしてあくまでも一貫して闘い続ける時、その両者が、実は単一の階級闘争・階級戦争である事を、目的意識化した階級として、プロレタリアートの前に指し示す事ができる。この際こそ、やはり党の建設、確立、存在であり、党への階級的立場であり、黨員の、共産主義者の、細胞の、全ゆる闘争現場戦場の中での存在、闘争、発展である党建設が、階級形成と一元化して闘われていく事はこの事を意味している。

運動時にいうならば、民主主義闘争と共産主義運動の連関の事であり、労働運動と社会主義の結合の問題であり、改良闘争と革命闘争の問題である。組織的には、統一戦線工作と党建設である。大衆と革命党、プロレタリアートと共産主義者の関係である。

そして、その根幹は、やはり政治闘争の問題であり、軍事問題である。我々は民主主義闘争の延々に社会主義を指定する民主主義者ではない。大衆闘争の積み重ねに革命闘争を夢想する大衆運動主義者ではない。資本主義の最終段階としての国家独占資本主義の生産基盤の発展完成に、共産主義を位置づける構造改革の「ブルジョア社会主義者」でもない。

我々は、社会主義を削り出し、その過程の不可避の政治権力としてのプロレタリア独裁を打ち建てる、現実的政治闘争としての共産主義者である。

経済闘争までは階級闘争を認め、あるいは政治的抵抗の闘いの中では階級闘争を認め、しかし権力を巡る闘い・権力闘争に於ける軍事攻防には階級闘争を認めない平和主義者とは我々は断固たる一線を画する。あくまでも階級闘争を全感に於いて闘い続ける共産主義者である。

経済が政治を決定し、政治が軍事を決定する時、軍事に於ける階級闘争を承認せず、実行しない者は、結局は、政治に於ける階級闘

争を行わず、そしてつまりは経済に於ける階級闘争を行わな
者である。軍事が全てを決定している時、階級闘争を行なうとは軍
事を行なうという事である。ブルジョア独裁が、独裁としての軍事
支配を行なっている時に、この軍事支配を打倒する、軍事的活動を
抜きに階級闘争一般を語る者は今日に於ける最大最高の、そして最
つとも犯罪的な日和見主義者である。それはつまりとところブルジョ
ア独裁の同盟者である。

階級闘争に於ける軍事、軍事に於ける階級闘争の基本的立場は次
の三つの段階によって規定される。すなわち、防衛―対峙―攻勢で
ある。これは革命の基本的発展構造である。
では今日に於ける日本の政治闘争―革命戦争は如何なる形態を持
つていて闘われるか。

我々はこの問いに、この最つとも重要な問いに、そして最つとも
さしせまった問題に次の原則的立場で解答する。

第一に、戦術的防ぎの闘いである。

第二に、攻勢的防ぎの闘いである。

第三に、攻勢的防ぎの闘いである。

戦術的防ぎの闘い、国際階級闘争―世界革命戦争の革命戦略の基本方
向である。現在の国際階級闘争は、帝国主義ブルジョアが、後
進国の反帝植民地革命戦争を先頭とする世界プロレタリアートが、
全ゆる地域、国家に於いて、民族解放―独立、社会主義革命、社会
主義建設闘争の世界革命戦争として、世界プロレタリア―社会主義勝利へ
向け圧倒的な前進を続けている時代であり、世界のいたるところ
で帝国主義ブルジョアとその同盟軍は、手ひどい敗北と後退を
余議なくされ、世界プロレタリアートの側に国際階級闘争のヘゲモ
ニーは移りつつある。世界革命戦争の対峙段階としての七十年代中
期のこの階級情勢に規定されて、その世界革命戦争の対峙から攻勢
への決定的メルクマールを握る、帝国主義国内階級闘争のプロレ
社会主義への前進―発展をその任務とする。帝国主義国内(先進国
―革命派の戦略方向は、全世界の圧倒的多数派たる世界のプロレタ
リアート―被抑圧人民に結合して、かつ国際階級闘争の圧倒的前進

上)にあり、革命党の党建設の過渡にある。いわば、ブルジョア独裁
とそれへの同盟軍に比して、プロレタリア―社会主義革命派の陣型は、ヤ
り少敵多であり、ブルジョアは、社会的全領域に於いて、帝
国主義国家権力を行使しての暴力的軍事的攻撃を中軸に、この未だ
建設途上にある指導部と、革命的プロレタリア―人民を破壊しよ
うと、日常的攻撃を加えてくる。階級闘争の根幹としての党建設を
固い抜かんとする我々は、従って日本に於ける階級闘争の力関係の
現段階に於いて、その戦術的方向は、あくまでも党建設と固い統一
戦線を建設する、プロレタリア―人民を組織する闘いとして、出
来る限りの味方陣型の武装と組織を維持、防衛―発展させる戦術を
固い抜かねばならない。つまり「戦術的に敵をあなどらない」闘争
として、日本に於ける革命戦争とそれの中の党(軍)―統一戦線の
確立を固い抜く。日本革命戦争の防ぎから対峙への固い過渡とし
ての七十年代中期の階級闘争は、戦術的防ぎの闘いである。

従って、第三の具体的闘争―戦術的基本方向は、あくまでも味方
の消耗を小さくし、敵の被害を大とする、攻撃的戦術でなければな
らない。量的問題として、敵が大であり味方が小である時の闘争は
敵をたどへ部分部分であろうとも確実に、粉砕―増殖し、味方を保
存し抜く確実完全「勝利戦」でなければならぬ。プロレタリアの、権
力陣地がなく、それ故非合法下の地下戦争として現在の日本階級闘
争―革命戦争がある時、権力実体を防衛する「陣地戦」でもなく、
軍事力互格に於ける対峙的戦争としての「正面戦」でもなく、地下
からする味方の有利な時点、場所に於ける連続的機動―遊撃戦、
つまり「ゲリラ戦」に於いてのみ、政治闘争の全ゆる固い、権力闘
争の基本的、つまりは軍事戦争の勝利がありうる。つまり「戦略に
よって敵を消滅する」闘争として、爆ロ―宣伝―煽動の政治闘争を
固い、権力闘争を指し示し、具体的に権力を解体してゆく、この「
ゲリラ戦」によって、プロレタリア―人民を勇気づけ、その戦い
方を指し示し、そして帝国主義ブルジョア―、国家権力の本質を

を背景に、従って世界プロレタリア―社会主義勝利へ向けた攻勢的戦
略として、つまり「戦略的に敵を見下す」全領域での勝利の展望でも
つてその闘いを展開すべきである。今日までの、経済主義―労働組
合主義および一國主義者達の戦略が、世界を見ず、国際階級闘争を見
見ず、世界プロレタリアートの大前進を見ない、その立場から一國
内階級形成と階級関係、および権力関係を指定する事によって、不
断の合法主義、日和見主義、その結論としての議会主義へと変質し
てきたその立場に於いて、我々は革命戦略の基本を、あくまでも攻
勢的戦術として世界プロレタリアートの現段階、国際階級闘争の現
状の、その一部としてこの帝国主義一國に於いて適用するのでは
ある。もとの一部としてこの帝国主義一國に於いて適用するのでは
ない。現在では資本主義の最終段階―帝国主義から社会主義への過渡期
としての世界社会主義革命の時代である。

戦術的防ぎは日本に於ける階級関係―階級闘争―日本革命戦争
の現段階に規定された革命戦争派の基本方向である。現在の帝国主
義一國に於ける日本階級闘争は、未だ帝国主義ブルジョア
が、ブルジョア独裁としてその権力を維持しており、プロレタリア
―被抑圧人民の革命戦争は、労働貴族―社会ファシストの制圧力
もふくめて、その大多数は残念ながら、プロレタリア―社会主義革命派の
陣型の側へと移行して、帝国主義労働運動、経済主義日和見
主義政治―民主主義派の、いわゆるブルジョアイデオロギーの下に
包括され、各種の苦悶、悲劇を余議なくされている。帝国主義ブルジョ
アも、世界的なプロレタリア―被抑圧人民の側の攻勢
を受けて、自己の最後の「本拠地」としての帝国主義国内に於いて
「自由と民主主義」から「抑圧とファシズム」への転化として支配
の形態を変えながら「域内平和」を維持する全ゆる努力を、ファシ
ズムへの移行として反革命攻撃を主軸とした、侵略、抑圧、反革命
―差別分析支配攻撃を全局面に於いて展開している。このプロレタ
リア―人民の側と、ブルジョアの側との関係の中で、プロレタ
―社会主義革命―世界革命戦争派の真の階級指導部は未だ建設の途上

引きずり出し、爆ロし、プロレタリア―人民を陣型に加へてゆく
事ができるのである。
現在に於ける、日本の階級闘争―革命戦争の基本的方向は、
第一の戦術的防ぎ、第二の戦術的防ぎ、第三の攻撃的戦術によ
つて全領域に於ける闘争は位置づけられ、戦わなければならない。
政治闘争―権力闘争の基本方向である。我々の党建設と階級形成の
内実は、世界プロレタリア―を獲得すべき目標とする綱領的立場に立って実
践的に武装されねばならない。一中委に於いて、確立された「綱領
―規約」(草案)は、現実的の革命実践によって検証されねばならず
そしてその闘いは現実展開されている。
行動綱領としてのスローガンは、その圧倒的正しさを、この間の
我が党の実践が証明し、またこれら更に、階級実践の中で深められ
る。

そして現在、この階級実践の中で、我々は具体的政治問題として
当面の獲得すべき目標として、「臨時革命政府」の樹立を更に大胆
にプロレタリア―人民の中におし進める時期に到達した。
この臨時革命政府は、世界革命戦争を日本に於いて闘う、全共産
主義者の統一戦線政府として、世界革命戦争の遂行機関、過渡的権
力―世界革命戦争―戦線―革命戦線、政府の実体を有する。プロ
レタリア―被抑圧人民の第一の任務は、なによりも社会主義革
命を闘う事であり、世界プロレタリア―を指導するものであり、世界革命
戦争の「根拠地」的権力に於いてはならない。全ゆる階級政策はそ
れに従属する。今や全ゆる政治勢力が政權闘争として固い方向を
提出している時、
我が党がプロレタリア―社会主義革命―革命戦争派も、日本革命戦争の防ぎ
期から対峙期へのメルクマールとしての、この臨時革命政府の樹立
をすなわち日本革命戦争の真の「内戦期」―それまでの権力対峙が
具体的表面公算化した二重権力状況への突入を、具体的プログラ
ム日程にのぼらせる時に突入した。今日これへ向けた党の固いと、

統一戦線工作は、圧倒的に重要である。革命戦線樹立！臨時革命政府に全権力を！我々はこの旗を大胆に掲げおし進めなければならぬ。

六十年代後半の階級激突をくり抜けて、日本階級闘争は日本社会主義革命戦争は、この七十年代中期をむかへて大きく前進しようとしている。

六十年代後半の大衆昂揚の意味での自然発生性を延長した形で、日本に於ける権力闘争は新たなし段階を迎え、それはまず革命戦争の「端初期」としての「ゲリラ戦」を、それぞれの戦闘団が追求する時点で突入した。七十年から七一年、そして連合赤軍敗北に至る七二年の「武装闘争」である。この闘いの中で、革命派は、その指導部は前衛としての党建設の敗北、次第に大きな限界を確認した。そしてそれ以降の反革命反動期の中で、それぞれの陣型の再編・強化を計りつつ、七四年の我が党の再編をひとつの軸として、七四年―七五年のいわゆる「戦争停着期」のゲリラ戦の「幼年期」をむかえた。そしてその中で、我が党をして、ようやく日本に於ける革命戦争の「端初期」を迎えたのである。そして現在、七十年代中期に於いて、戦争に於ける熾盛期と競争期とする、革命戦争の「青年期・成長期」を、党建設の「停着期」として、七六年から数年の闘いとしてその日程にのぼらせておき、この闘いの中で、指導部としての我が党は、ますます強化拡大されるであろう。その目標に我々は、革命戦争の「壮年期・確立期」としての二重権力状況に於ける「内戦期」を、革命戦争の樹立をメルクマールとして、党に於ける将来に世界革命戦争の指導部としての「青年期・成長期」を七十年代後半に於いて必ずや迎えるであろう。そしてこの内戦期は二重権力下に於ける革命戦争は世界革命戦争の一部として、世界プロレタリアの階級闘争の「死滅期」という新たな形態での世界

世界的階級攻防の中での、第三世界人民の闘いの高揚に即自的に伴キし、共産主義運動の立場に立つ事ができず、いわば大衆人民の立場に立つてその戦争への「合流」を主張する傾向と、帝國主義国内の下層プロレタリアの存在する階級の立場の悲愴さ、悲劇と、そこから自然発生的に発生する憤激、反抗にこめられた即自的に伴キするところの立場は、それ自身の即自性・自然発生性を、目的意識的な階級形成として止揚する為の、ブルジョアイデオロギー、小ブル社会主義等々の党派闘争の実践的展開を通しての闘いという、プロレタリア階級政治の「プロレタリア革命」も重要な標を洗い流してしまいう徹底した民主主義派、小ブルヒューマニズムの見地であり、プロレタリアの目的意識性を即自的大衆昂揚の民主主義的闘争に解消させる事に於いて、社会主義を民主主義に解消する徹底したブルジョア思想の見地である。プロレタリア革命は、一般的な階級の自然発生的昂揚からのみ指定されるのではない事は、資本主義批判に於けるマルクスの著論論等の闘いを見ても明らかである。世界的昂揚や、あるいはその根源としての階級の悲愴さ一般に伴キする立場は、自己の党建設と階級形成の目的意識性を自己解消する。徹底した解党主義である。

第二に従ってそのイデオロギー的立場は、プロレタリア階級性を科学的な社会主義の目的意識性の中で獲得し打ち滅ぼすという共産主義者としての立場ではなく、資本主義の表われを通しての結果としての存在への即自的意識の「悲愴さ」があるという「憤激」のいづれにしてもあるがままの自然発生的に伴キするという事で小ブル民主主義イデオロギーの見地、ナロードニズムとしての小ブルヒューマニズムの側に立つのである。プロレタリアートの階級的存在を自己自身が、プロレタリアの向自化した、いわゆる本質的な階級意識を生み出すのではなく、その即自的反抗や憤激はせいぜい「労働組合主義的意識」一般しか生みださないのであり、そしてや、階級性そのものの複合化された「第三世界」「下層プロレタリア」一般のその即自的イデオロギー表現を、共産主義運動は共産主義

階級闘争を迎え、党の「壮年期・確立期」を現実のものとするであろう。我々は、この大道を確実にみすえて、更なる戦争体制を強化せねばならぬし、党建設と統一戦線工作を強化せねばならぬ。さて、我々は、路線問題を確認する最後に、今日に於ける二重の小ブル日和見主義の解党主義的見地を批判してまかねばならない。ひとつは「第三世界合流論」であり、もう一つは「下層プロレタリア」である。

この両者はそのいづれもが、一定の革命路線上の有効性・先進性を七十年代初頭に於いて占めた事を我々は確認しうる。しかしそれはあくまでも大衆運動論のそれであって、党建設の立場に於いては、まったくの小ブルヒューマニズム、現代ナロードニズムのそれではない事に於いて、党建設を除外する解党主義である事を、我々は今日の我々の自身の一定の党建設の勝利の上になつて断固として批判する。

戦略指定に於ける「第三世界合流論」と「下層プロレタリア」は、「第三世界の帝國主義国内への共通階層としての波及の下層プロレタリア」という事で、いづれも同じ立場を有する。それが一方で、「世界階級闘争の最前線としての」第三世界であり、他方で「帝國主義国内に於ける或とも抑圧された階層としての」下層プロレタリアである事の表現的違いではない。しかしこれも、この理論に立脚する部分が或とも抑圧搾取された部分に「革命性」を求めるといふ事に於いて共通性を有する。

我々はこの両者の立場を以下の三点にわたって批判する。これは今日の帝國主義国内革命派、とりわけ問題であるのはプロレタリア社会主義を追求する部分だが、この種の自然発生性の解党主義的立場を収めているという内、あり、プロレタリア社会主義革命派の即自的止揚の前にも批判を確認しておかねばならない。

第一に、その立場の有する「自然発生性」は解党主義としての内容である。

イデオロギーに止揚するものとしてそれへの対峙をなさねばならない。党建設は共産主義運動そのものが、全ゆる領域に於けるブルジョアとプロレタリアの対決であるという事は、そのイデオロギー闘争に於いてのブルジョア階級性の復権・確立としての闘いを不可避とするであろう。階級のブルジョアイデオロギー・共産主義は決してあるがままのブルジョアが生じさせようものではなく、この不断のイデオロギー闘争をくりぬけてのみその闘いの位置は与えられるのである。現代ナロードニズムは、この階級性としてのプロレタリア社会主義への道をブルジョアヒューマニズムの立場で洗い流す事に於いて徹底して反動的である。

第三に、社会主義革命を超越階級的な立場で語る事である。それは「民族解放・社会主義革命戦争」という主張や、「プロレタリア革命の根拠地としての下層」といふ言ひまわしに排他性である。民族解放一般が社会主義革命を表現するものでもなければ、下層（ワグランド）がプロレタリア革命を生み出すというものでもない事は明白である。この立場こそ、社会主義革命・プロレタリア革命を、民主主義的闘争・民族解放闘争、あるいは人民の闘い一般に解消し、その社会主義革命の内実を一切説明する事のない、非階級的立場である。我々はいわやこの立場こそ、ブルジョアの側に立つものである。我々は第三世界人民の闘いを断固として認め、かつそれとの結合を世界革命戦争と見て単一化させていく。しかしこの中で、プロレタリア社会主義をめぐって徹底した共産主義運動を迎え、党建設は党派闘争がプロレタリアの内実を指定するものとして闘い抜かれなければならない。我々は、第三世界の人民の闘いそれぞれと、他方その指導部としての諸党派との区別と連関をキッチリとふまえ、その中で、闘うプロレタリアートと被抑圧人民と結合しつつ、かつ、たとへば中国共産党ノ連共産党あるいは、ベトナム労働党とは、世界プロレタリアをめぐって世界党の建設を巡る「党派闘争」としてその連関は存在するのである。この事を抜きにして、共産主義運動の独自性を抜きにして、党の問題を抜きにして、一般的な連帯や、結合、合流、あるいは依拠等々

を主張しつるはずがないのである。

かつての「プロレタリア革命への合流」や、そのまったくの裏返しとして「プロレタリア人民への進歩的思想等」、完全なる一國主義、觀念主義、總じての経済主義的立場の小ブル急進主義を、今日、その装束を新装して登場させてきたのが、「第三世界合流論」「下層階級は熱心」であり、これに対して、我々は革命問題が、社会主義的階級闘争がいや共産主義運動が、決して「帝國主義國內人民の自己裁判運動」ではないという事を、なによりもあきらかにしておかねばならないだろう。

世界革命戦争を真に指導領導する世界党の建設を巡る闘いとして今日の文壇建設の闘い、党派闘争がある事を確認し、全ゆるブルジョアイデオロギイ、小ブル社会主義との闘いをプロレタリア社会主義革命の階級階級闘争として打ち破り、帝國主義國內に於ける世界革命戦争を更に大膽に闘い抜かねばならない。

プロレタリア戦争派の陣型

党一戦線問題の歴史的立場の論に！

中央書記局「赤衛」第七号より抜載

我々はまず、党から始まる事を確認した。党から始まる事、これがレーニン主義の根幹である。ブルジョア階級に、我々は、共産主義者の党を対置したのである。この区別は、明確にしなければならぬ。即ち、党建設から始まるのではなく、「党」から始まる事、これである。何故、この区別が強調されなければならぬのか。口を開けば「党の建設」を語り、百年一日の如く「党がない」と決定的階級を先へ引き延ばし、その裏、「党の為の闘争」と、「党の闘争」の連関性と、区別をわいせし、党を自然発生性の前に挿入させる。百の「過激」としての党」の存在が、日本階級闘争に様々の混乱と日進見主義を持ち込んだ根幹であるからである。たとへ一人でも、二人でも科学的社會主義「民主主義」を導きの糸として、私生活を革命し、革命に私生活を捧げ、革命命を職業として、共産主義者の党の闘いを、党の為の闘いを、共産主義の展望の中で運動化する、その「党から始まる事」これである。「党」には、組織であるし、階級であるし、しかし要は、共産主義の未来から逆規定された、その普遍性が進行する現在の権力実体として登場する事にある。では「党権力」とは何か！ブルジョアスターの「党権力」を想起すれば十分である。党一政府！ブルジョア階級、つまるところ政治警察、官軍である。付言すれば、これら権力構成員は、決してブルジョア階級ではない。が、階級は、ブルジョア階級権力である。我々も模倣する事から始めてみても悪くない。否！この事から始まるならば我々は間違いない勝利する階級なのである。かれらは、腐朽を極め、死滅しつつ、

る階級の権力であり、我々は、破壊され、前進する大多数の階級の権力である。にもかかわらず、この階級は、今なお、圧倒的なブルジョアスターと、そのイデオロギイの支配下にある。この階級の政治は、それ自体では、ブルジョア政治である。すなわち、共産主義の影響下でない限り、である。党がなければ、この階級の未来はない。「党から始まる事」これである。ブルジョア階級にプロレタリア独裁！（共産主義への過渡的政治権力として）一を対置しなければならぬ。プロレタリアを樹立する事！階級形成はまさしくこの一点（階級闘争）において党建設と一元的に闘かわれるのである。いかなる階級一階級とも分ち難いこのプロレタリア階級の自己形成過程こそプロレタリア政治の萌芽であり、資本のクビキからこの階級を解放する階級である。くりかえして言おう！しかし、この階級は、資本主義の、その中から生れ出た権力である。その自然発生性は、容易に、過去の歴史がそうであった。「党」がびつのである。まさしく、過去の歴史がそうであった。「党建設」と同時一歩に闘かわれる事、この事で、この階級は「未来」を得るのである。そして、今、我々は、強固に組織され、堅固な不屈の階級革命軍からなる、共産主義者党を待っている。すでに階級は切り開かれている。固い入れない二つの階級が、二つの権力、遠くならず二つの政府に於いて、内戦を準備している。それは階級闘争力であり、階級闘争である。そして、我が党が、「党権力」として、登場した時、戦争は、不可避であった！

党一軍事機関（中央軍事組織部）は、次の二つの戦線と、三種の武装勢力を組織、維持し、更に奥深く、広げに発展させなければならぬ。これら各戦線一武装勢力は、プロレタリア共産主義政治の舞台であり、革命戦争の重層する陣型である。

一、すべての権力は、党へ集中されなければならない。これが我々の階級テーゼの基本である。プロレタリアの成熟発展段階は、「

この間の武装闘争に於ける 語った傾向について

宣伝・煽動の軍事から権力打倒・激減の軍事へと革命戦争
を發展させよ！
中央軍事組織部（中央軍）

軍事行動は、権力闘争—政治闘争から規定される目的意識的戦術の一環として展開されなければならない。それはあくまでも、共産主義運動のプロ独一社会主義へ向けた党の戦術のそれとしてである。それ以外の軍事は、軍事として評価する事はできない。せいぜいのころ大衆憤激の一部のそれとしてのみの評価に留まる。

この間の各種の武装闘争と軍事行動の中に、若干の誤った傾向として、この目的意識性、権力闘争から位置づけ得ない形態での武装闘争が少なからずみられる。これは固う先進的グループにとっても不幸な事であるし、プロレタリアート・被抑圧人民にとっても無益な事である。

革命闘争下に於ける武装闘争は、「計画された戦術」としての軍事行動である。ブルジョア独裁権力に対する、現在のには非公然であるところのプロレタリア独裁権力の存在実体として階級闘争の運動上に公然化する、地下からの共産主義運動の戦場である。それはブルジョア独裁の打倒とプロレタリア独裁の樹立という二重の権力闘争として結実する。その二重の権力闘争を、共産主義実体としての権力であるところの共産主義党が闘い指導し、しかも止揚するのである。権力闘争すなわち政治闘争が、自然発生的な大衆暴動一般からではなく、共産主義の未来からのみ、上からの目的意識性からのみ位置づけられ展開されるという事は、この現実が存在する共産主義権力、すなわち党の前提をもって初めて規定される。大衆闘争から政治闘争—権力闘争が生まれるのではなく、政治闘争—権力闘争から—その手段としての大衆闘争が創り出されるのである。これが共産主義者の立場である。自然発生的な社会主義者や本質としての民主主義者であるところの経済主義者達は、こうは考えない。大衆闘争の昂揚發展から政治闘争が生まれ、その政治闘争の極限に権力

闘争があり、そこでもって初めて権力問題としての軍事闘争が課題となる。こうして平和闘争—合法闘争と軍事闘争—非合法闘争に長良いのりとミツを創り出す事をする。そして現在を合法闘争の時代として、大衆闘争一般を闘う事に熱意をよせる。つまりは民主主義闘争に留まり、党と前衛を、せいぜいのところその指導部としてしか位置づけられない。

しかし、階級闘争には、ブルジョア独裁への道か、プロレタリア独裁への道かの二つの道しかない。民主主義への闘いか社会主義・共産主義への闘いかのいずれかである。しかも、資本主義の時代に於ける階級闘争は、それ以前の階級闘争と決定的に異なるものとして、プロレタリアートとブルジョアジエの二大階級が闘う階級闘争であり、それは不可避にその階級闘争が誕生するや否や、資本主義の次の時代としてある社会主義の為の階級闘争としてある。プロレタリアートの唯一の階級闘争は、社会主義の為の階級闘争として存在するのである。資本主義の時代に、ブルジョアジエの階級支配の戦術としてある民主主義を、「高度に拡充させる」闘いではない。闘争は、プロレタリアートが、そのあるがままの存在では、すなわち資本主義の矛盾・階級支配の結果の現われに対する反抗・抵抗の闘争一般からは、この階級闘争の唯一の止揚の道である。社会主義共産主義の前の階級闘争が生まれてこないという事である。それは共産主義イデオロギイの突撃暴動権力の存在としての共産主義党によって初めて創り出される。そしてこの共産主義から規定される社会主義・共産主義の為の闘争が、つまりは、その為の権力闘争—政治闘争が、自然発生的な大衆闘争一般を止揚するのである。そしてその為には、共産主義者は、一箇二重の闘いを展開する。つまり、初めから一貫して政治闘争—権力闘争を闘う事と、他方、様々な表われとしての大衆闘争、経済闘争を、それを止揚する為に闘うという二重の闘いである。従って、政治闘争—権力闘争が一方で党の闘いとして存在し、それから規定された戦術としての大衆闘争の指導とその内容での闘争があるのである。これが他の民主主義者・社会主義者と異なる共産主義者の立場である。

従って運動的には、共産主義運動に、自然発生的民主主義闘争が止揚されて初めて階級闘争として存在し得る。つまりは、共産主義党として存在する未来への運動者—共産主義者として階級の止揚されてこそ唯一の階級の止揚が可能なのである。自然発生的プロレタリアート一般からは未来は生まれ得ないのである。それはただにだ共産主義者によってのみ未来を創り出す事が出来るのである。

このあるべき権力としての共産主義と共産主義者への階級の止揚の前に問われるのが、今日の資本主義時代の階級闘争である。それ以外には、階級闘争とは呼び得ない。大衆一般を止揚する前に政治闘争—権力闘争一般の例からの目的意識的暴露・宣伝・煽動が闘われる。それは決して大衆闘争を創り出す為の暴露・宣伝・煽動ではない。政治闘争—権力闘争を、大衆の最深处の中から創り出しそれへと止揚する為の暴露・宣伝・煽動である。それは、階級矛盾一般や富の分配の平等一般を暴露するだけでなく、その矛盾、不平等あるいは、搾取の階級の根源を暴露するものであり、つまりは、階級支配の構造を暴露するものである。そして同時に、プロレタリアートが共産主義者として闘う事の位置と意味と、しかもそれが資本主義そのものを打倒・湯瀝して、社会主義から共産主義へと結実する事の不可避性と、その導きの糸としての共産主義運動の存在性を宣伝・煽動するものである。この闘いは、ブルジョア独裁の本質を引き出し暴露する闘争であり、プロレタリア独裁と社会主義・共産主義への権力の存在を指し示す闘争である。従って二つの権力の衝突であり、それが暴力の外皮をまとって、事、独裁軍事支配に対する闘いである事で、敵の暴露の為にも、味方の宣伝・煽動の為にも、それを表現するのは軍事行動、つまりは武装闘争として闘われざるを得ない。ブルジョア独裁が非武装で、帝國主義軍も政治治安警察も持っていないとするなら、我々も平和的に、軍事行動を抜きにした暴力革命以外の革命闘争を闘い得るだろう。しかしその様な事は、空想一般にすぎない。つまりは、ブルジョア独裁権力の

軍事支配を明確にし、しかも、プロレタリア独裁権力の闘う存在を指し示す、目的意識的な権力闘争として軍事闘争を展開されざるを得ない。しかも、敵の軍事支配の本質を引きずり出しそれを打倒するその為の権力、創り出す、二重の闘いとしての軍事である。これはその当初から目的意識的軍事であり、階級総力戦であり、つまりは敵消滅、味方保存の戦術である。

この立場、総略としての戦略から決定された計画的戦術として軍事行動—武装闘争は闘われる。つまりは、革命戦争としてである。従って大衆闘争の自然発生的性を期待し、それを創り出す為の宣伝・煽動の軍事とは決定的に異なる。それは、自然発生的な軍事である。宣伝の為の軍事や、自然発生的な昂揚を創り出す軍事は、不可避にその自然発生的性に見合った路線と組織を創り上げてしまう。「第三世界論」や「下層階級論」や、あるいはかつての「前段階階級理論」である。反日武装戦線「狼」やその他の戦術団や、あるいはかつての赤軍派—連合赤軍である。この諸君の弱さは、すでに明らかであり、それは技術の問題ではない。小ブル的な帝國主義本國人の「自己解体」の思想や、大衆の終極への参加を夢想する「革命的ロマン」の思想では、真の軍事も行えないし、階級闘争に勝利する事はできない。それはせいぜいのところ、自然発生的な憤激や反抗の思想を生み出すにすぎない。そして、その思想一般では、大衆は立ち上りもしないし闘いもしないし、後についてようともしない。その自然発生的性の悲劇は、組織内部に反えいし、単なる「決意」か「武器」の問題へと還元された。更に、より大きな大衆の自然発生的性の憤激を創り出す前の戦術へ「移行する」に留まる。これがその集団は不可避に解体する。連合赤軍がそうであり、「狼」がそうである。と同時に他方でこの自然発生的軍事は、敵の自然発生的性として「やり易い」軍事へとその腐敗を深める。「ゲリラ主義」の自然発生的性への寄解としての腐敗である。一部の戦術団の諸君や、そして赤軍派やM.L.派の諸君

この傾向が現われる。軍事を全く理解していない自分達が、政治闘争、権力闘争、つまり革命戦争の側から武装闘争を闘わないから、あるいは闘おうとは少しも考えていないから、この種の傾向は出てくる。それは組織が小の時は組織の戦闘団化としてのサークル化であり、それより組織が大きい時は、軍事部門の独自化と、党の機能的分化という組織の分散化、解体化である。これではせいぜいのところ、決意は立派だが趣味としての軍事であり、敵がひとたび攻撃に出れば列をみだして逃避するような軍隊ではない。敵に逮捕されたり、解体させられたりする軍隊は、決して大衆を引きつける事はできない。もちろん戦闘の時の部分的消耗はある。しかし、それは倍する敵の消耗を確実に連結して削り出さねばならない。自分の玉砕の「決意主義」では、階級的軍事は行えない。あるいは組織の部分的消耗としての一部門だけの軍事、遊びの軍事では敵を潰滅する事はできない。それではまずなによりも、党が大衆の怒りの中に軍事を通じて解体される。共産主義も党もあつたものではない。その様な組織内の一部の人間による硬直した軍事より、大衆の様々な創意工夫の自然発生的軍事の方が、なんばかオモロイ闘争がやれる。我々の軍事は、権力闘争の軍事であり、ブルジョア独裁の本質を引きずりだし、それを具体的に解体し、しかもプロレタリア独裁の確力的登場と、その共産主義運動を指示する軍事である。敵の打倒と、味方の拡大の軍事である。それは、帝國主義ブルジョアジーと、へえ部分的にでも消滅させ、それを通じて、敵の本質を引きずりだし、そして他方では、全ての闘うプロレタリア人民に政治闘争の権力闘争の闘いを指示し、しかも、共産主義党の権力としての実体と強固さを示すものである。敵を確実に潰滅し、マヒさせ、そして味方は完全に防衛しぬく、確實勝利戦としてある。そしてその闘いは、政治闘争と権力闘争の側から絶対的に必要な戦闘である限り「容易な」戦闘でなくとも確実に、その意識戦をやり抜くのである。かつて我が党は、我が党の非合法化の理由となつた機関紙「十一号」の中央軍事組織部（中央軍）論文で、「『ゲリラ』闘争の必要性

と多様性と、そしてそれまでの一定の合法主義の状況に対して、全ゆる闘いで軍事闘争での有効性を主張した。これはもとより今日も有効であり、いさかもその大衆的闘争の中で占める位置を少なくするものではない。武器や戦術は、いかなる形態でも取りうる。また取らねばならない。敵をマヒさせる全ゆる戦術でも取りうる。ある。戦略電話（ウソの通報）やニセ爆弾はまだ有効だし、中核派、カクマル派の戦術がこの間明らかになったように、鉄パイプ、ボール、マサカリで、四十五人からあるいは数十名で、街頭の下真中で、人を殺す事も可能であり、家居に夜中突入して殺せばよいのであり、この戦術を、武器を、符に敵の頭上にもおとせばよいのであり、まずもって政治警察の公安のイヌどもの一人一人を街頭で、しん室で襲えば良いし、帝國主義ブルジョアジーや反動罪人達を、ボールでメック打ちにすれば良いし、爆弾でやるよりその方が確実に殺せる。

問題は、その戦術や武器でなく、その権力闘争の側からの位置なのである。ある意味で、中核派の（カクマル戦争論）は、その時おりの戦術のヌーバーのプラグマチズムは別に、して、符に第一の敵を（カクマル）に置く事で、一環して「目的意識的」であるといえる。従つて中核派の求殺隊の諸君は、この四年間の「戦争」の中で鍛練されているし、思想性もあるし、そして口も堅い。ただ問題は、何故そのボールを「カクマル」ともども権力の一人一人に打ち込まないかという事である。これも確かに、その権力闘争の目的意識性として「敵」にもそのボールが打ち込まれるという事を具体的な意識戦として指示せば、中核派の諸君も自然発生的にはあれやらざるを得なくならないと思ふ。符に、路線上の目的意識性なのである。

今こそ、我々の「ゲリラ」の路線の基本である「やりたいたい時」という問題の「やらねばならない時」と「やれる時」の結合の内実を「やらねばならない時」の問題として一層深め、それを実践化する必要がある。もう一步武装闘争を深めようではないかと、いう事である。思想的にも組織的にも、そして戦術の問題でも。

我が党は、権力闘争の立場で必要とされる時点であれば、いかなる困難も乗り越えて、この軍事行動、武装闘争を闘い抜くし、そして確実に勝利し味方を保存するし、そしてまた、現実にもうして来た。はつきりいおう。もう宣伝の為の愚鈍な闘争は必要でなくなつたし、自然発生的な武装闘争では更なる一步を切り開く事はできない。権力闘争の軍事として、帝國主義をマヒ解体させ、そして共産主義運動の権力実存として、武装闘争を闘い抜くのである。これを通じてプロレタリアート、人民に政治闘争の権力闘争の闘いとその戦術を指示し、その闘いへと吸引し、そして党へ、階級軍隊へ、共産主義として止揚吸引するのである。符に今日が、社会主義へ共産主義へ向けたプロレタリア社会主義革命の時代であり、革命戦争として政治闘争と権力闘争が問われる事を指示するのである。すなわち、一方のブルジョア独裁と國家と対し、プロレタリア独裁権力と共産主義運動が対峙する、二重権力の時代であり、我々は党に結集する事と、そこから革命戦争を闘う事と、未来へと清くプロレタリア世界社会主義共和国の一員である事、権力対権力の交戦状態にある事として、ブルジョア独裁権力の敵の司法では、一切闘争はできず掃蕩としての立場以外は一切存在しないという事を明らかにするのである。裁判闘争など存在しない。我々の宣伝・煽動の為に利用するのである。闘争（本籍）は、世界社会主義共和国であり、住所は世界であり、職業は赤軍兵士なのである。日本國等のブルジョア政府の司法は適用されないのである。

この立場からの、一切の軍事行動・武装闘争がある。自的意識的な軍事、権力闘争の軍事、機動的な軍事である。これから全ての戦術は規定されしかも、その武器と形態は全ゆる事が可能である。ゲリラ路線とはこの事なのである。

今や、確実に敵を潰滅する軍事が問われる時代である。一人一人、ひとつひとつを確実に、いかなる手段でも殺し、解体する時代である。武器は何でも良い。ボールでもマサカリでも、ホウチヨウでも

何でも良い。敵が一人になる時を狙え。敵の少ない所を襲え。ハリガネ一本でもやれるし、石でもなぐり殺せる。爆弾を一発やれば後は市民社会へ逃げ込むなど、敵がその逃げ込む市民社会を支配しているのだから、無抵抗で撲られるしかない。階級戦士に戦時と平時の差はない。生きる限り全て階級戦争の戦時である。私服に尾行されたら、その私服を逆にカメラで撮り、実行し、家を陥れ、そして確実に捕束機滅せよ。敵が一人になった時に弱いか。街頭で孤立した機動隊のあのシヨンベンをたらず恐怖した姿ではっきりしているではないか。今日までは、なぐるだけという敵の戦術にある意味であわせたが、今や確実に殺すという赤色テロルの時代なのである。もはや敵を街頭でも、居住区でも、機動隊の隊列や派出所だけの権力として、符にインディアンが騎兵隊を、白人を、とりでの中に閉じ込めたように、敵を包圍し、一人になった時に、襲うのだ。武器はこの戦術に規定されるだけである。

我々は、真に階級的軍事を行なわねばならないし、そして今行なっている。宣伝の爆弾は今、はつきり終わったのである。

今こそ赤色報復絶滅戦の嵐を！
職業反革命—政治警察を一人一人
確実に機滅せよ！

声明 「左」右の解党主義を粉砕し

党の団結を更に強化せよ

「我々は何故に彼らを放逐せねばならなかったか」

中央委員会

党中央委員会は全党一全黨員および我党に結集する多くの協力者の同志諸君に、第二回中央委員会によって決定された決議を公示せねばならない。我党の再建一市委以降の多大な困難の闘いの中で、結核は、我党の試練を自らから勝ち抜く事のできなかった日和見主義者達の党からの放逐を明らかにせねばならないのである。中央委員会は、この事実を痛苦の思いで明らかにせねばならず、しかしこれらの脱盟分子達との「左」右の党内闘争を党的強化の為に闘い抜きかつ今日（第二回）中央委員会が革命的に開催され、全党の問題に於ける一致が勝ち取られ、この脱盟分子達の解党策動を党的現実的組織強化拡大と各機関一機関員の充実という具体的実践の中で止揚し、更に党的強化が勝ち取られたという事を、党自身の一つの試練に我が党が勝利したものととして確認し、あえて中央委員会は、この事を公示するのである。

彼ら脱盟分子達の解党策動の本質的問題は、今日の政治闘争革命命戦争の闘いという基本的路線の中で、党をいかなる組織として建設するかという、第一の組織問題、そしてそれに規定された政治闘争の戦術問題、および第三に、従って総路線綱領問題に於ける結局の小ブル的自由主義と分散主義、あるいは、無政府主義という將に自然発生的対処である事の無残な敗北であるといえる。第一回中央委員会によって勝ち取られた総路線の長期にわたる持久的闘いに耐えなくなった事での逃げであり、解党を組んだが、あるいは個人的であったかの区別なく、將に彼らの党的敗北であると断言しうるのである。

すでにこの党内に発生した「左」右の日和見主義の問題に対して党中央委員会の政治報告がその解決もふくめ明らかにしているので、

再度この彼ら脱盟分子達の策動の階級闘争に於ける位置の規定をあえてここではしない。ただ、彼らがいかなる形であったにせよ、党再建以降の各機関一各部門に於ける中軸的メンバーであった事を考慮し、各員に対する総論的な事実確認をここであらためてなしておきたい。

党中央委員会は、他の我が党への協力者・支持者の同志战友諸君が、この彼ら脱盟分子達の解党策動を見抜き、悪夢を天にいだく事なく、再度我党に、党中央委員会に結集し、党中央の指示のもとに帝國主義に対する革命戦争にすすんで参加される事を熱望するものである。

理論的には、これら脱盟分子達の傾向は、第一の傾向として、「階級闘争主義」を掲げたグループと、第二の傾向として、「大衆闘争」主義を掲げたグループと、第三にその兩者いずれかへの付和雷同しての個人的脱走という三つの傾向に要約しうる。しかも問題は脱走者の頭目××に代表的に、この両傾向をその時に感じてどちらとも主張し、「路線転換の必要性」としてまったく「左」右にブレルという、その両傾向が重なっているという事である。そしてまた問題のもう一つの軸は、策動者の頭目××に代表的に、自己の活動を党の活動として行うのではなく、自己延命の為にフランクシヨン（分派）活動としての活動に最重点を置き、しかも今日、犯罪的にも他組織一他党派にフランクシヨンが加えてこむという裏切りロスパイ活動へと変質してしまった事である。

この問題は、現在、我が党のみが唯一、革命戦争を党として闘う組織である事に対して、様々な形でくりかえされるであろう腐敗分子を通じた、あるいは専門的分子を通じた、策略陰謀スパイ活動としての「解党」策動のひとつの現われであると確認しうるのである。將に我が党は、この闘いこそが今日のひとつの階級闘争である事党内敵を粉砕打倒する革命闘争である事を確認する。従ってこの階級闘争の中で、これら脱盟分子達に対しては、我党は、はうって一九となり闘争を闘い抜き、革命闘争革命戦争として把えるのである。この過程で、敵対分子達を完全抹殺する事をため

るう事は断じてあり得ないであろう。党には一切のブルジョアジーの「認める自由」などは存在しないのである。

脱盟決定決議 公示

- 「脱盟決定者」
 - ×× ×× 党中央委員会中央委員 中央組織部長
 - ×× ×× 中央軍事組織部長 中央宣伝部長
 - ×× ×× 中央宣伝局長 中央機関紙部長
 - ×× ×× 東京地方委員会議長
 - ×× ×× 東京地方委員会委員 東京都委員会委員
 - ×× ×× 関西地方委員会委員 大阪府委員会委員
 - ×× ×× 東京地方委員会候補 神奈川県委員会委員
 - ×× ×× 関西地方委員会候補 大阪府委員会委員
 - ×× ×× 関西地方委員会候補 京都府委員会委員

- 一、第二回中央委員会は、第一回中央委員会以降の脱盟者に対する脱盟勧告決議に基づく脱盟決議を満場一致で採択した
- 一、脱盟者に関する一切の党的任務と党的権利はハク奪された
- 一、脱盟者の今後一切の言動に対する責任を党はもろろん負わな
- い。
- 一、脱盟決定決議に関する党中央委員会の声明を合わせて公示し
- 二、この決議は正式に決定された
- 一、この決定の効力は第二回中央委員会に於ける同決議の採択をもって効力を有する

「反スタ」体制間矛盾論 「第三世界」合流論を止揚し「反スタ論」の変種「反社帝論」の日和見主義を批判する！

（反スタ派への屈服、「一向過渡期世界論」の毛派的改作について）

目次

1. 総論 第二回中央委員会決議 スローガンの問題について
 - 反社会帝國主義スローガンを揚棄する！
2. 「社会主義國家」の現代史的位置
 - 「國家資本主義」―「社会主義的原始蓄積過程
 - 「過渡期世界」とプロレタリア國際主義
 - 「人民國家」に於けるプロ独「社会主義」と、ML党の路線
 - 「後進國革命」とプロ独
 - プロ独と過渡期世界
 - 共產主義の第一段階と「社会主義的生産關係」について
 - 4. 世界革命と我々の総路線
 - 反スタ派―第三世界革命派（毛沢東主義）の一国主義について！
 - 一向「過渡期世界論」の破産と、雪崩れうつ毛沢東主義への乗り移りを粉砕する。

一 総論 「組織された暴力」と「プロレタリア國際主義」の輝やかしい総路線に索引されて、不死鳥の如く再生した第二ブントの歴史は、今日なお、日本階級闘争の行えを指し照す、世界共產主義の高地にそびえている。六十年代後半、大衆武装闘争の高揚から、七十年安保闘争を結節点として、連合「赤軍」の光陰を血肉化し、世界階級闘争の最前線に、今一度この輝やかしい総路線の復権を試みる革命派

の総路線が獲得された。「組織された暴力」を、「計画としての戦術」―「軍事の共産主義化」―「党の共産主義軍事」へと高めあげ階級支配として組織された武装プロレタリアートの権力―「プロレタリア独裁を準備する実権力」として、「プロレタリア国際主義」を先進国革命の唯一無二の形―「反帝プロレタリア革命戦争―世界革命戦争として路線化する、プロレタリア独裁の総路線こそ、まさしくプロレタリアの二十年の歴史を継承する、世界共産主義革命の総路線である。

第二回中央委員会決議

「スローガン問題について」

我々の世界革命戦略は、次のマルクス主義革命史観に立脚して、構築される。そして、この革命史観から出発するならば、「世界」は、我々のものである。

1. 階級の存在は、この一定の歴史的発展段階だけと結びついていくという事。
2. 階級闘争は、必然的にプロレタリア独裁を導くという事
3. この独裁そのものは、すべての階級の場業と、無階級社会といたる「過渡」をなすにすぎないという事。

(レーニン)

―資本主義社会と共産主義社会との間には、前者の後者への革命的転化の時期がよこたわっている。これに限定されるものは、又政治上の過渡期であって、この時期の国家は、プロレタリアートの革命的独裁にはかならない。マルクス主義者とは、階級闘争の承認を、プロレタリア独裁の承認にまずおしひらけた人だけである。

革命党派の路線は、とりわけ、世界革命派は、世界をおおいつく自己の任務を語るべきであって、あれやこれやと世界を説明し、分類し、そして自らの任務を狭めるべきではない。マルクス主義者とは、世界を説明するのではなく、世界を変革する人だけである。我々は、歴史上最も革命的な―あらゆる階級、階級を領導し、あらゆる抑圧、差別、階級苦から人類を解放する―階級、プロレタリア階級が存在し、生産諸関係の発展が社会主義を準備する、そうした

革命期に於ける前衛である。そしてこの時代の切開は、とりもたず我々の任務である。プロレタリアートは、彼らを生み出した社会―資本主義社会の発展段階に規定され、彼らの未来―(共産主義の未来に逆規定された実体的政治権力)―共産主義の成熟に逆規定される。そして何よりも重要な事は、この二つのモメント(生産諸関係の発展段階、二M主義の成熟段階)の弁証法的発展こそが革命史観の基軸であるという事である。プロレタリア独裁は、この展開の合目的命題として実現される「当面の戦略」である。我々がスターリニズムの発生や、社会帝国主義を批判する時、この革命史観の弁証法的発展の歴史的対立物の立場を、そのM主義者の立場である。反スター派、反社帝派、第三世界諸君の世界を本主義的に把捉する立場は、まさしく、世界を説明するだけの、観念論である。あるがままの階級社会のい型に、「党の戦略」を容解させる自然発生性への拜服である。

反社会帝国主義スローガンを揚棄する！

1. 先進資本主義国(帝国主義時代)に於ける国家独占資本主義段階―社会主義原始蓄積過程)―後進資本主義国(帝国主義時代に於ける産業資本主義段階―植民地、半植民地)
 2. 先進資本主義国階級闘争から出発するプロレタリア国家(共産主義の第一段階)―後進資本主義国階級闘争(反植民地―民族解放)から出発する人民国家(前プロレタリア社会主義)即ち、階級の歴史的発展段階に規定された一種の戦線と、革命的型、そして、勝利した人民国家の存在によって構成される現代革命の世界である。そして、ここから出発する先進国革命の、本国内革命派の任務は、自明である。世界プロレタリア独裁を最小限綱領とし、世界共産主義建設を最大綱領とする党の路線がすべてである。
- 後進国革命、国際帝国主義の最後部にあつて、帝国主義垂直運動―資源略取、労働力収奪、土地収奪―の下部構造下、蓄積的階級分化による階級間対立が激化している、買弁プロレタリア、大地主、を走ると、帝国主義植民地支配構造―民族的、国家的抑圧体制と、

その反えいとして、民族解放人民民主主義革命の二国的路線―人民戦争路線を突破しえず、総じて、資本主義の発展段階に規定されている。にもかかわらず、組織されたM主義の存在と、その正しい路線は、すでに成立した「人民国家」の社会主義建設―プロレタリア国際主義とプロレタリア独裁運動と堅く結合し、世界革命の外線を形成している。後進国革命は、ロシア革命を起点として、東ヨーロッパ―中国―インドシナ―中東―アフリカ革命に運動する系フであつて、現代革命の主要な勢力である。

我々は、「後進国革命」の定式化と、M主義革命史観の獲得によって、革命ロシア、革命中国とその系フ「第三世界革命」の世界革命への一元的立場を勝ちとった。ここから導き出される結論は一つである。我々は、ロシア、中国、ベトナム「後進国革命」へ合流あるいは、依拠するのではなくして、これら「反帝植民地革命戦争」を「反帝プロレタリア革命戦争」の主導的展開でもって、「世界革命戦争」の大道に、又、これら「人民国家」を、「世界プロレタリア独裁」でもって「世界共産主義建設」に揚棄しなければならぬ。そして、勝利した「人民社会主義国」プロレタリアートは、世界革命戦争に合流しなければならぬ。

反スタ、反社帝、反社会排外主義が、我々の綱領的立場である事は、いうまでもない。しかし、それらが、路線的立場でない事は、次の決定によって、一層深められる。

まずプロレタリア独裁であつて

「社会主義革命」一般ではない！

国家独占資本主義経済下における、社会資本の動員と、生産の社会的分業は、それ自体で社会主義的生産様式へと転化する事はないが、その中に、社会主義のハンドルが隠されている。―エンゲルスは、「空想より科学へ」の中で、資本主義の発展を次の様に段階づけている。

- 一、社会的生産と資本主義的取得の矛盾
 - 二、プロレタリアとブルジョアジの対立
 - 三、個々の工場に於ける生産の組織性と、全社会に於ける生産の無政府性ととの対立―国独占資段階に於ける、国民経済の行政的統制と帝国主義間不均等発展―その外化としての国際階級闘争
 - 四、生産方法の交換方法に対する叛逆
- すなわち、資本主義批判の基軸を、「蓄積論」あるいは、「交換過程」―一般に置かれ、我々は、ブルジョアなきブルジョア国家―「人民社会主義国」のクビキから永遠に解れる事はないのである。
- 「社会主義革命」は、生産手段の社会化―「人民所有を実現したが商品経済―貨幣経済を媒介とする資本主義的取得―生活資料の私的取得は廃絶されない。即ち、生産手段の所有形態(国家所有、労働者管理、全人民所有)を一切の基準として提出された百出の「社会主義建設」が、歴史的に検証されるに及んで、それでもなお存在する階級と階級対立が、今一度、その歴史的制約を突破して、追求すべき「社会主義国家」の普遍性を要求している。国家資本主義―社会主義の原始蓄積過程は、社会主義的生産様式の発展段階とその抑制を準備しており、主要にその主人の交代を、歴史的転換期に戦略化する、諸々の修正主義潮流―先進国「共産党」、構造改革諸派、カウツキー主義者等の登場契機は、物質的―歴史的根拠をもっているのである。北歐社民主義も、ユーゴ自主管理社会主義も、そして先進国「平和革命」も、すべてこの様式の相違を超えて、「国家資本主義」これがその依拠基盤である。「社会主義国家」は、まさにこの体制の別称としてあそばされていくにすぎない。その転化の様式(革命スタイル)の相違は、階級構成と階級関係、即ちその歴史的發展段階に規定されているにすぎず、すべての「人民独裁路線派」の末路である。彼らの唯一の興味は、「社会主義的生産様式」であり、共産主義の彼岸化がその基本的な性格である。我々の指摘は、共産主義の未来から棄中される。共産主義の基準、統制、

そして原理から、「社会主義」の一切を点検しなければならぬ。こうした交換過程における私的性格の生産と資本主義的取得の矛盾が存在する限り、「社会主義国家」における、その外化一階級対立の再生産は不可避である。ソビエトの物的刺激一行政的統制による生産力主義、中国に於ける二つの道の闘争一プロ独永続論は、この必然の結果であり、先進国革命論一レーニン主義の「後進国革命」への敗北的表現であり、スターリン主義を開く路線であった。すなわち、「労働に応じた分配」社会主義的経済政策を、「共産主義の第一段階」に於ける過渡的政治権力一プロレタリア独裁の成熟と不可分に展開しなければならぬにもかかわらず、ロシア資本主義の後退性一プロの未成熟性と結合させた事一（新経済政策、ネップ）その結果、分配の私的性格一資本主義的交換様式の復活一階級（党官僚とプロ階級）間対立を再生産していった。こうした「後進国社会主義革命」が、不断に生み出す階級対立の下部構造の再生産過程に無自覚か、あるいは、それを承認した上で、それでもなお、復活する資本主義の道との闘い一「労働者国家」内階級闘争、プロ独永久運動一へ「合流」しようとする諸君、諸君の「依拠」しつある先進国プロレタリアートは、獨資下一国家的収奪一収奪の国民的体系の中で、擬似社会主義的生産関係を止揚しつつあるのである。彼らは、国家として組織された支配階級として、十分な訓練と教育を受けているのである。彼らは、生産と分配の社会的一国家的官理を遂行するに十分な、計算と統制の能力をもっている。我々は、決して、一きよめ共産主義革命を主張しているのではない。資本主義の高度の発展は、共産主義の第一段階に於ける過渡的政治権力一支配階級として組織された膨大なプロレタリアート一プロ独裁を現実のものとしてしている。そして生産の国民的体系一社会主義建設の歴史の逆行を解き放つ階級の力として存在している。今、我々は、「社会主義革命」をあれやこれやとてあそぶのではなく、「人民社会主義国家」を止揚する「共産主義の未来から逆規定された現存的権力実体」として党主体を高め上げ、世界プロ独樹立！世界共産主義建設！の大道を、前進しなければならぬ。

全国政治新聞「赤軍」の再刊について

中央宣伝局機関紙部

今や 確実にかが「革命闘争」は敵に勝利している！

党が完全に地下に潜行して以来、党の機関紙活動は、地下非公然機関紙「赤色通信」(改題して「赤衛」)の秘密裏の発行とその党関係者のみの配布という、将に非公然機関紙活動の本一にしばられた。準組織戦術法の適用である爆取四条の適用を受け、党の宣伝物、宣伝活動そのものが禁止されるという事態の中で、いわば敵によって遮られたこの非合法下の闘いは、この機関紙活動の闘いにも多大の試練と、そしてまた多大の教訓を我々に与えてくれた。党はこの事を逆に敵帝國主義ブルジョア達に対して礼を言うべきかもしれない。将に、階級闘争によって一歩一歩繰えられてきたわけである。現在すでに「非合法党の建設」を主張する組織は数多く存在する。しかし、現実には組織が、「非合法」下に置かれた党派は党以外にはなく、またその「非合法」下での闘いに勝利し、党組織の拡大を勝ち取った組織は戦前一戦後の共産党もふくめ、我が党以外には存在しない。七四年十二月二日の我が党の機関紙に対する爆取四条の適用をもってしての党の宣伝活動から組織活動の全ての「合法」活動を禁止するという日帝政治警察の大弾圧が開示されて以降の、この一年有余の「非合法党の闘い」に我々は党中央を先頭にして全党をあげて闘い抜き、今日、将にはこりう一定の勝利をあげる事ができた。

そしてこの我々の非合法党建設、地下組織の勝利の実績のうえに、再度我が党が公然と政治宣伝戦に突入する事を党中央は決定した。この党中央の最高指示に基づき、我々中央宣伝局、同機関紙部の全機関員は、この一年有余の地下宣伝活動の諸活動とその闘いの中で獲得した印刷、配布等をふくむ一切の能力、技術を総結集して

いわゆる「遅れた資本主義国」に於ける革命の必然的形態一「人民国家」に対する水平主義的反発、反スタ派に代表されるスタ圏一「人民国家」の不可逆的転巻の排外的切り捨てと、それへの排絶一第三世界合流派に対し、我々の総路線は、過渡的世界の止揚派としてのそれ、即ち、先進国革命の普遍性一プロ独革命戦争一共産主義革命の主導性と「人民国家」の場棄として登場する。

- 日本プロレタリアート人民は 反帝プロレタリア
- 革命戦争に決起し
- 世界プロ独樹立！
- 世界共産主義建設！
- 世界共産主義革命戦争に勝利しよう！

全国政治新聞「赤軍」紙の再刊を闘い取らんとしたのである。党の自力をもってしての非合法下に於ける全国政治新聞の発行に對して、我々部員はその使命の重大さと、そしてその任務の与えられた事の光栄を深く胸にきざみ、この偉大なる闘いへと全勢力を集中したのである。

この任務は非合法党一地下組織の闘いの中で、党の拡大、地下組織の建設、あるいは軍事行動の勝利、等々の眼に見える闘いと比べても、その占める位置は同等の、いやそれ以上の革命的意義を有するものである。我が部員の同志達の苦勞は、この作戦への長期にわたる準備過程をふくめ、ほとんど筆では表し得ない激しく苦しいものであった。ほとんどの基本材料、資金、そして技術を、あるいは膨大な協力者網を自力で獲得するという気の遠くなるこの闘いに、全機関員は雄しく挑戦していった。我々はこの挑戦が決って無敵ではなかった事を、全国政治新聞「赤軍」第十三号の革命的発刊をもってして全大衆の前に、いささかのほりをもって表明する事ができる。そしてこの長期にわたる闘いの道程の中で、同時にまた我が党の組織そのものの、数々の異なる形態をもってしての戦力、戦士、つまりは党員、党の拡大が勝ち取られた事もあわせて表わしておきたい。非合法機関紙「赤衛」も、まったく完璧な形で定期化され拡大された。

諸君同志諸君！

党中央は決定し指示した！全ての人々の中に公然と我が党の指針を打ち建てよ！と。非公然、秘密裏に、我が党の指示を伝達せよ！と。そして、我が宣伝局、および機関紙部の機関員は大胆にそして細心にその任務を貫徹した。今、諸君同志の眼の前にあるこの「赤軍」第十三号こそがその証しである。

諸君同志諸君！

我々、革命組織、非合法革命家のこのひとつの決定的な字塔を全党をあげた地下組織戦と革命的軍事活動の、将に反帝プロレタ

リア革命戦争の中で防衛し維持し発展させていく。多くの長い試練の中で同盟結党以来、足かけ八年の全教訓を武器に、非合法戦線、地下闘争、軍事活動の全成果を背負って、我が党はこの闘いを闘い抜く。

あの七四年十二月、再建してほんのヨチヨチ歩きの我が党に對してくりひろげられた、日本階級闘争史上特筆されるべき公然活動に對する大弾圧を、自己の革命組織の主張・宣伝・その思想そのものへかけられた、直接的攻撃を、執筆者はもとより発行者、分配者、印刷所から書店まで、そして部分的には、その印刷物の所持だけの理由でのをれとして、全国にわたる捜査、押収、発禁処分、および逮捕・指名手配等あの帝國主義者、政治警察の我が革命組織への挑戦を、今日、我が党が再度、大公然と、この宣伝闘争、煽動活動のひとつの軸として、公然全国政治新聞「赤軍」の発刊を勝ち取った事でもって、我が党の決定的勝利を戦取したと宣告する。あの大弾圧・大攻撃の痛手を、それを倍する我が党の組織された力でもって見事止揚し克服したと言明するのである。

將に政治警察、帝國主義者達にとつて、この「赤軍」の再刊は己の眼を疑いたくなるような信じ難い事に違いない。敵内部からの情報入手に於いても、我が党の完璧な防衛は他に例を見ないものである。しかし、反動どもよ、我が党は君達の頭脳と能力を超えるものとして存在し、定着し、そして発展しているのだ。君達が、いかにこの事態にあわてふためき再度の我が党への挑戦を試みても、結局のところ、デツチアアツか手あたり次第の弾圧でもってしか、その恐怖を解消する道はなく、そしてつまりは何ひとつその恐怖を薄める事はできないのだ。

今や、階級闘争、革命戦争下における、ひとつの重要な戦線である、そして最つとも重要な闘いである、政治警察との攻防に、我が党が、我々、革命組織の闘が、この日本に於いても勝利している事を、この「赤軍」の再刊でもって、歴史に深く刻印するのである！

赤 軍

NO. 13

共産主義者同盟赤軍派（日本委員会）

中央宣伝局機関紙部発行

表 誤 正

1 上「我が党の」 ↓「我が党の本本」
 2 上「出」の「本」 ↓「本」
 3 上「上」 ↓「上」
 4 上「上」 ↓「上」
 5 上「上」 ↓「上」
 6 上「上」 ↓「上」
 7 上「上」 ↓「上」
 8 上「上」 ↓「上」
 9 上「上」 ↓「上」
 10 上「上」 ↓「上」
 11 上「上」 ↓「上」
 12 上「上」 ↓「上」
 13 上「上」 ↓「上」
 14 上「上」 ↓「上」

15 上「上」 ↓「上」
 16 上「上」 ↓「上」
 17 上「上」 ↓「上」
 18 上「上」 ↓「上」
 19 上「上」 ↓「上」
 20 上「上」 ↓「上」
 21 上「上」 ↓「上」
 22 上「上」 ↓「上」
 23 上「上」 ↓「上」
 24 上「上」 ↓「上」
 25 上「上」 ↓「上」
 26 上「上」 ↓「上」
 27 上「上」 ↓「上」
 28 上「上」 ↓「上」
 29 上「上」 ↓「上」
 30 上「上」 ↓「上」

定 価 3 0 0 円